ひといき

「大阪桐蔭高校校歌を作曲」秘話

大川創業株式会社代表取締役会長
大阪大学工業会理事
大川進一郎

今春のセンバツ高校野球大会は私の作曲した大阪桐蔭高校校歌が７度も甲子園球場で鳴り響き幕を閉じた。今年も「私が甲子園へ応援に行くと勝つ」というジンクスは健在であった。校歌が鳴り終わると茶の間の知人から私の携帯に一斉に電話やメールが届く。俺の母校の校歌は忘れたが、お前の作った桐蔭の校歌は歌えるで。と言ってくれると有難い。あの歌は校歌じゃなく優勝を讃える歌やな。と言って下さる方もいる。

私は作曲家でも音楽家でもないが、どうして大阪桐蔭高校の校歌を作曲することになったのか。その経緯を紐解いてみたい。

軍歌一辺倒の小学生時代も６年生の夏に終戦。翌年からどっと西洋音楽が日本に入って来た。母に買ってもらったシュナーベルのピアノとシューベルトの弦楽四重奏「鱒」が、私を音楽の道に入るきっかけを作ってくれた。

78回転のＳＰレコードを何回も入れ替えるのはもどかしいが、今聞いたメロディーの余韻に浸る事もできる貴重な時間でもある。特に鱒と副題がついているのでどういう曲か想像し易い。大きな鱒２尾が小さな子供達を引き連れ、清い川を遡る姿が、当時なかったカラーテレビを見ているようだ。曲によって映画のように目に浮かぶ。例えばベートーヴェンの交響曲「田園」のように絵になるものと、第九のように詩とか小説のように聞こえる交響曲もあることに気付いたが、運命も英雄も最初は文字として受け止めていたが、何度もフルトヴェングラー指揮のジャジャジャジャーンを聞いていると、いつの間にか絵になってくる。運命の第一楽章はベートーヴェンの苦悩する姿から解決しよう、苦難を乗り切ろう。さぁやるぞ。と立ち上がろうとする姿が目に浮かぶ。第一楽章の冒頭から曲に歌詞をつけてみる。（運命の扉を叩く音）「トン・トン・トン・トーン。トン・トン・トン・トーン。ここでこうすりゃこうなって、そこでそうすりゃそうなって。兎角この世は、兎角この世は住みにくいんだ。そやそうや。愚痴を言っても埒開かぬ。愚痴を言っても埒開かぬ。そこでだ、そこでだ、そこでどうすりゃ良いのか、どうすりゃ良いのか、どうすりゃ良いのか分からないんだ。分からないんだ。何とか良い智恵ないものかなぁ、何とかしなくちゃ俺は死んじゃよ。さあもう一度戸を叩け。（63小節）良い考えある。良い考えある。何でもいいから、これはと思えば失敗恐れず」（中略）。と歌詞にすればすぐ絵になる。第二楽章で打開するための策をあれやこれや模索しながら作戦を立てている姿が目に浮かぶ。第三楽章は問題解決で悪魔つまりモンスターと一騎打ち。ベートーヴェンも最初は計算通りモンスターと互角に戦うが、第一身体が違う。段々追い詰められて、土俵際馬乗りされて、脳天グサリの瞬間かと思いきや、彼は左手で小刀抜いてモンスターの腑をグサッと一突き。休憩なしに第四楽章の冒頭、「やったぞ我勝てり。やったぞ、やったぞ、俺は悪魔をやっつけた。俺は悪魔をやっつけた…。」そして最後、ベートーヴェンは余程嬉しかったのか、勝った、勝った、勝ったと連呼の後、万歳三唱ならぬ万歳十唱もして喜んで終る。私はそのベートーヴェンの姿を私に置き換え、日本タオルで鉢巻して受験勉強したが、いざ合格してみると、「運命」なんか聞くのもいや。ボケっと上向いて寝転び、交響曲「田園」を聞き乍ら視力回復の為に星座を数えた。ストコフスキー、ブルノ・ワルター、トスカニーニと比べてもやはり当時はフルトヴェングラーが一番よく聞いたレコード時代であった。旧制四条畷中学がその頃新制高校になり、音楽教師Ｔ・Ｆ先生に一目惚れ。中学１年生から大学２年生の名古屋大学対抗戦まで選手であった卓球に加え、新たに先生指導の合唱団に入部するだけでは飽き足らず、ピアノの個人レッスンを受け、その年の文化祭でモーツァルトのソナタを弾き、友達を驚かせ、翌２年生の時は、パデレフスキーのメヌエットを演奏した。３年生になると先生は転校され私の片思いもたった２年で終わり、皆受験に向かうのに、私は何故か野崎観音はマリア観音だと言われた美術の先生の言葉に魅せられ、考古学部に入り、キリシタン灯篭の発見に寄与したが、当然落第し、ＹＭＣＡ予

備校に入学。これが私の人生を決めるクラリネットに出会う事となる。

皆シュンとした暗い冷たい教室で、ただ一人「俺は阪大オーケストラのコンサートマスターになる」と吠えている男がいた。４日目も同じ言葉を聞かされ、そんなにいいコンサートマスターに俺もなれるのかと聞くと、M君「オーケストラの何も知らん奴やな。コンマスはオケで一人。俺が入ったらお前なんか要らん」「ピアノじゃオケ不要。20歳から弦楽器は無理やな。フルートなら、口笛みたいな物。プーと吹いたら直ぐ音が出るで」帰宅しオヤジに「今度合格したらフルート買ってくれ」「ヨッシャヨッシャ」と言うオヤジの言葉に奮闘。今まで質屋の息子と呼ばれるのが嫌いで、かと言って小学４年生の時、小児結核を患い、戦時中の事。将来に夢が無かった。フルートを買ってもらって阪大交響楽団に入るという夢を持つ事が出来て、俄然やる気が出て、その年の11月に理科系で８番、翌受験間際の１月に何と首席だ。東大、京大、阪大、神大など百人を超す進学率抜群の、ノーベル賞を受賞した利根川教授も在籍していた名門ＹＭＣＡ予備校での成績を土産に、M君と二人合格した。オヤジに「約束通り合格祝いにフルート買ってくれ」と言うと、「そんな事言ったかいな。それよりこの一年、浪人の親やと辛い思いをさせられ、その上フルートを買えとは何という親不孝な奴か」と一喝され、シュンとなっている私を見て、父は「ここに質流れの楽器がある。それを持って行け」と蔵から出してくれたクラリネットを84歳になっても吹き続けている。私にとって神様と呼ぶに相応しいクラリネットとの出会いである。

阪大オケに入ってフルートを吹く、それが質流れのクラリネットに代わったが、あれだけ憧れて入部したオーケストラに２年先輩の歯学部Ｉさんが首席を務めていて、実に素晴らしい音色で上手に吹いておられる。ところが、セカンド奏者と言えば低和音をブーブーと吹くだけで、メロディーが無い。先輩にいい処取りされて、こちらはブーブーと不満を言っている感じ。それも何十小節も休んだ後に吹くから、練習時、折角数えても途中で指揮者は止めてやり直しをする。するとまた一から数え直す。どうせ次も止まるだろうと数えていない時に限って止まらず、吹く機会を逸する。あれだけ憧れて入部したのに、口惜しさが込み上げてくる。意を決して「先輩は毎日何時間稽古されますか」と訊ねると「まあ１時間やな」と先輩。そこで私はどんな鈍でも人の３倍やれば追い抜けると心に決め、３時間以上練習すると決め、毎日それを実行した。多い時は８時間以上練習する時もあった。効果は１年後に現れた。工業会理事園田先生のお兄さんのピアノソロでウェーバーの小協奏曲の途中、行進曲に合わせて軍隊が近付き、クラリネットの一番良い部分に入った途端、名手先輩のクラリネットが壊れて先輩は席を立たれた。すかさず私はその楽譜を取り寄せ、上手に吹き終えた。弦楽器の場合、上席の楽器が故障すると、次席の奏者は自分の楽器を渡すのであるが、私の質流れのクラリネットは旧型で運指が異なり、持ち替えができない。先輩は、これから首席は君に譲ると言って退団された。以後７年間、卒業後も指揮者は私を放さなかった。翌年モーツァルト交響曲39番の第三楽章メヌエットのソロを吹き終わるや拍手が鳴り止まず、仕方なく指揮者は中断して私を立たせて頭を下げ、アンコールに応えて再度メヌエットを演奏した。卒業年度、モーツァルトのクラリネット協奏曲をやらせて頂いた。私は阪大オケに籍を置くだけでなく、北野高校に指導に行ったり、アマオケ２楽団とプロ９～11名で編成する大阪室内楽団でＮＨＫの生放送をしたり、千日前と道頓堀の角から東側の音楽喫茶「銀馬車」で映画音楽やポピュラー・クラシックを終電まで吹いた。この楽団に私の初恋ヴァイオリニストＫ・Ｈが居た。小学４年生以来の再会で押しまくり、ゲット。婚約もし、卒研の関電に依頼された「スリートジャンプ」（雪解けの頃、電線に積もった雪が解けて電線が跳ね上がり相間短絡などを起こさせる現象）は山村研で、私一人の実験だ。夜は演奏があるので昼間彼女に手伝わせていたら、突然私の実験中に山村教授が入って来られ、彼女を見つけるや、以後毎日点検に来られる生真面目さ。結婚式のスピーチをお願いに行った時、「例の女性ですか」と聞かれ、「いえ、違います」

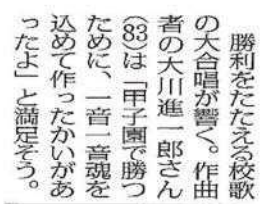
彼女の実家は千里山ロータリーの手前で、遊びに行った時に新聞で50社のコマーシャルソングの募集を見つけ、私が口ずさみ、彼女がヴァイオリンで音を取ってくれた「クローバー石鹸」の歌が入選。その後サンヨーに32年に入社した時の初任給が12,000円の時代に、賞金5,000円を得た。私はモーツァルトやベートーヴェンのように絶対音感がないから、楽器に頼らざるを得ない。彼女が助けてくれた。審査委員長が当時コマソンの第一人者三木トリロー、その弟子いずみ・たくも入賞していた。主催朝日放送。サンヨーに入社して間もなく全国放送され、一人こっそり仕事現場を離れて休憩室で聴いた。他社の分も聴いたが遜色ない。大いに自信をつけ、サンヨーの社歌作詞者が高校、大学の先輩だった関係で、サンヨーの代理店「坂口電化ハウス」の社歌を始め、

当社も含め５社、年賀状も２年に１回は歌を入れている。そんな事で、大東ロータリークラブに入会する時、趣味の欄は皆さんゴルフのハンディいくらと書かれるが、私はその後、相続対策で昭和47年に創業したボウリング事業が失敗で、“社員は必死で頑張っているのに、社長がライバルのゴルフで現場を離れる訳にはいかぬ。趣味欄に卓球、クラリネット、作曲と書いたところ、入会早々大東ロータリーソングの作曲を依頼され、毎週新作の歌を全員で歌っていたら、会員の大西大阪産大理事長（当時）から、「良い歌や。大阪桐蔭高校も甲子園が近付いて来たので、それに相応しいこんな校歌を作曲してもらえないか」と嬉しい依頼を受けた。甲子園に行くことより大阪で優勝するのが難しい。ＰＬ、上宮、近大付属、浪商、桜ノ宮、北陽、東海大仰星等強豪揃い。今年はセンバツの決勝戦で大阪シリーズだった事でも解る。私は「解りました。近付いたではなく、優勝して優勝旗を先頭に選手が一列になってマンモス球場を１周し、アルプス席の理事長に頭を下げる光景をお目にかけます。」と大口を叩いて作曲に取り掛かった。日本手拭いを頭に巻き、祈りながら、一音一音、「優勝しました。有難うございました。」と叫びながら校歌を作った。伴奏は当時私が楽団代表を務めていた関西フィルハーモニー管弦楽団。歌は関西喜歌劇協会主宰の故向井揖爾さん。他校は当時、生徒のブラスバンドの演奏に生徒の合唱か、先生のピアノ伴奏に生徒の合唱だったのに対し、プロのオーケストラと歌手でジャーンと演奏するとそれだけで対戦校は戦意を喪失する。桐蔭がブラバンで３イニングと６イニング目に校歌が演奏されるというのがその証拠だ。甲子園で優勝すると言って作られた校歌が他にあるだろうか。現阪神の藤浪投手で夏の大会を優勝した時、大阪桐蔭ブラバンの梅田総監督から指揮棒を手渡され、校歌を指揮するように言われ、振り終わるや、万雷の拍手。私は、指揮はそんなに上手くないのに、何故かと観客の顔を見れば、私じゃなくてグランドを見ている。私も振り向くと、藤波投手がホームランをレフトスタンドに叩き込み、セカンドベースを回っているところだった。戦勝会で藤浪投手に話すと、「一生で１本しかホームランを打っていない。その時大川先生に振ってもらっていたのですか、甲子園第１号です。」と感慨深げだった。

作曲した年の夏の大阪大会決勝戦が、桑田、清原で日本一になったＰＬ。そのＰＬに０対１で負けた投手は今中。中日にスカウトされ貴重な左腕として活躍した。作曲して３年後、初出場初優勝を果たし、約束通り選手たちは理事長に向かって頭を下げた。「どうです。言った通りになったでしょう」今、桐蔭ＯＢで中日の平田、日ハムの中田、西武の中村の３名がプロ野球で４番バッターだし、阪神には西岡、藤浪、岩田、西田の４名、西武には浅村、森も大活躍中である。祈りながら作曲した事が重要である。甲子園常連校の中に宗教校が多い。ＰＬ、平安、天理、智弁学園、上宮、創価学園、佼成学園等いとまがない。校歌を祈りながら作ったように、その祈りとは、つまり宣言する事である。合格します様に、得られます様に、治ります様に、と祈ったのでは目的は達成できない。マイナス言葉も厳禁だ。浅田真央さん、肝心な時に実力が出せず引退した。「もし金メダルを取れなかったら国民の皆様にどう言って謝ろうかと考え夜も眠れない」これじゃ金メダルは取れない。大阪桐蔭が春夏連覇した時の事。主将が「こんなに旨い上手い握り寿司を食べたのは生まれて初めてや。次の夏の大会も頑張りまっさ」これで良いのだ。もし神社・仏閣に賽銭を投げていたら投げ損。達成していない目的をそんなちっぽけな献金で神さんが言う事を聞いてくれる訳がない。神社に行けば5,000万円何某と彫られた石柱が立っている。5,000万円も出せば神様も喜んでその人の為に尽くされるだろうが、今未達の状態から実現させるのは、筋肉を付ける程難しく、不可能に近い。お願いしますと言わずに、お陰様で出来ました。達成しました。有難うございました。と過去形でお礼を言うと神様は正直な方で嘘はつかない。俺まだ何もやってないのに、俺の名を呼んで感謝してくれとる。それじゃ一度くらい何かせにゃならん。と神様が人間業と思えない力で助けてくれる。稀勢の里が横綱になった時に言った「何か不思議な力が湧いてきた」というあの不思議な力の事を言う。御礼は過去形で言う事。騙されたつもりで、祈りながら、つまり宣言しながら研究をして是非ノーベル賞を取ってもらいたい。最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

（電気・Ｓ 32 年）

３月31日付　読売新聞より



勝利をたたえる校歌の大合唱が響く。作曲者の大川進一郎さん(83)は「甲子園で勝つために、一音一音魂を込めて作ったかいがあったよ」と満足そう。

４月２日付　毎日新聞より